

## 「パリの同時多発テロ」

2015年11月18日

パリで13日の夜、主イエスが十字架で殺された金曜日、キリスト教徒が縁起が悪いという日に同時多発テロが起こった。8名のテロリストたちが6個所で爆発物を爆発させ、銃撃して、129名の死者、352名の負傷者を出した。1月に、フランスの風刺週刊誌シャルリー・エブド本社が襲われ、17名が殺害された。イスラム教徒が預言者として尊敬するムハンマドが風刺されたと怒っての襲撃であった。表現の自由を圧殺しようとしたテロリストたちが批難されたことは当然である。今回のテロは無差別に市民を襲った卑劣極まるテロである。フランス国民はもとより、世界を震撼させている。

IS（イスラム国）はフランスの空爆に対する報復であると犯行声明を出している。10月にエジプトのシナイ半島にロシア旅客機が墜落し、乗客224名が全員死亡した。同じくISのテロ説が有力視されている。イスラム過激派の犯行とみられるテロは各地で頻発し、止まることがないというのが現状であると言わざるを得ない。

有志連合はISの支配地域に、また最近、ロシア軍もアサド政権に反抗する反政府活動地域に空爆を行っている。ISは窮地にあるとも報道されている。だからこそ、今回のテロに及んだのではないか。フランスは、9・11の同時多発テロを受けた米国と同じように「戦争だ」と言って、IS地域への激しい報復空爆をしている。憎悪の連鎖はテロを増幅する。テロが世界に飛び火するのは目に見えている。また、空爆は誤爆を伴い、無辜の市民が犠牲になっている。テロを受けた先進諸国では情報が開示され、惨劇を知ることができるが、空爆されている地域の状況はほとんど報道されていない。戦禍から逃れようとする難民は悲惨であるが、彼らは恵まれているという。逃げられない人々を襲う恐怖と多くのむごい死を想像する。空爆下の惨状は正視できないのではないか。

聖書は「出エジプト」をイスラエル民族解放の喜びとして伝えている。脱出を決定づけたのは「主の過越」であった。エジプト人の初子が悉く殺される事件が起こった。これが、歴史的事実とするならば、圧政に苦しんだ者たちのテロであろう。神が自らの手を下して人を殺すことは決してない。周到に準備したテロが、功を奏して脱出できたと考えるのが自然である。非対称の力の下では、テロしかないとい詰められることも十分あり得る。

イスラム教徒は、モーセの十戒の第一戒「あなたは、わたしをおいてほかに神があってはならない」を最も大切な掟であると信じ、他者を寛容に受容する人々である。一部の人々が過激思想に染まったのである。彼らには言い分がある。世界を席卷した自由と民主主義を普遍的価値とみなす大国によって、イスラム諸国は多大な差別と抑圧を受けてきた。現在も、その構造は変わっていない。欧米への攻撃は正義であると容易に転化できる。彼らの喪失感と怒りは深く、対話の回線を持とうともしない。

大量破壊兵器を持つと危険視して、行われたイラク戦争は間違いであった。フセインを亡きものにすれば、民主化ができるということも空論であった。有志連合は植民地支配以来からの歴史的背景を見直し、対応を変えなければ、争いは収まらない。難民になってヨーロッパに入った人がテロリストになると伝えられている。ISで訓練を受け、散らされた彼らは不満を募らせるイスラム教徒と共同して、いつでもどこでもテロを起こし得る。日本は武器を持つての参戦はしていないが、有志連合に経済的支援を行っているので、敵対国と位置づけられている。まして、安保関連法に基づいて自衛隊を派遣しようものなら、テロを受け、修羅場となりかねない。「武器よ、さらば」である。